

【実践報告】

関西 IPE 研究会 活動報告
－「専門職教育者交流型 IPE」の可能性と課題

柴原真知子

A Report of Kansai Inter-Professional Education Network
－ Implications for future development & challenges of Inter-professional Communication for
Professional Education Practitioners

SHIBAHARA, Machiko

はじめに

本稿は、教育機関や職場で指導・教育を担当する専門職教育者の異業種交流 IPE (Inter-Professional Education)を行う「関西 IPE 研究会」の発足経緯及び実践的取り組みの一端を報告することを目的とする。同研究会は、平成 23～25 年度科学研究費補助金「専門職教育と専門職性に関する異業種間比較研究—成人教育学の観点から」(挑戦的萌芽研究、代表:渡邊洋子)の一環として 2013 年に発足し、さまざまな領域の現場で指導・育成にあたる専門職教育者が月一回程度の交流の場となっている。

ここでの IPE とは、いくつかの種類に分類される IPE 活動のうちの「専門職教育者交流型 IPE」と呼ばれるものである¹⁾。医療系 IPE に代表されるように職場を同じくする多業種の効果的な連携・協働を目指すもの (IPW 直結型 IPE) や、ビジネスに関する情報交換や人脈づくりをねらいとした (ビジネス交流型 IPE) などとは異なり、「専門職教育者交流型 IPE」は、大学等の教育機関や職場で学生教育や新人への指導にあたる専門職教育者が領域を越えて、交流し課題を共に探究することを意味する。現状では、専門職教育者が他の領域の専門職教育者と交流する機会はない。ここには、専門職者養成の実際や課題については、同一領域の知識や経験、技術をもった専門職者にしか理解しえない、という縦割りの発想があると考えられる。

しかし、この縦割りの発想ゆえに、専門職教育者は実践的課題を自分自身で抱え込まなければならない状況へと追いやられることも少なくない。現場で、教育よりも専門職者としての日々の業務が優先され、教育者としての課題は脇に置かざるを得ず、結果的に教育者としての専門的な力量形成へのニーズは満たされないことも考えられる。専門職教育者交流型 IPE を行う関西 IPE 研究会はこのような問題意識から、「専門職者^{プロフェッショナル}を育てる」ことを共通項に、異なる領域の専門職教育者をネットワーク化することで、直面している課題を多面的に理解し、乗り越え

るための新しい視点をを得ることを目指している。

生涯教育学専攻者として 2007 年からこの取り組みには携わり、ワークショップの企画・運営を専門職教育実践者の方々と行ってきた筆者の経験から、以下では、関西 IPE 研究会が発足した経緯と、「専門職教育者交流型 IPE」の一つの事例として 2013 年 3 月に開催した IPE ワークショップ「職業人の成長と経験をシェアする」（主催：京都大学 IPE 研究会、2013 年 3 月 23 日実施）の概要を示す。その上で、同ワークショップにゲストとして参加した英国成人教育・生涯教育学研究者 P・ジャービス氏（サリー大学名誉教授）の提起を手がかりに、このような「専門職教育者交流型 IPE」にはどのような可能性と課題があるかを簡潔に整理したい。

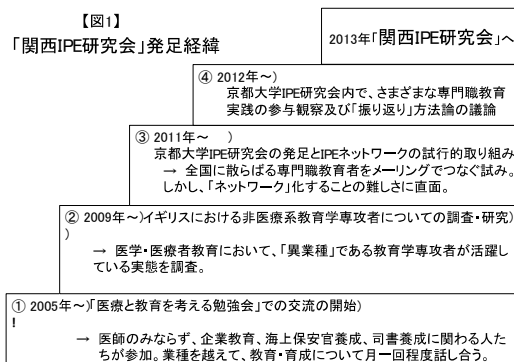
1. 関西 IPE 研究会の趣旨と経緯

関西 IPE 研究会は、「職業人の成長と経験をシェアする」の開催をきっかけとして発足した会であり、京都・大阪を中心とする関西地区での専門職教育者の異業種横断型交流を目的とするものである。参加者の領域は、医学・看護などの医療系、企業、芸術など多様であり、職業・専門職の領域は限定していない。日常業務では協働することのないこれらの専門職教育者が領域の壁を超えて交流することで、直面している現場での課題を多面的に捉え、解決に向けた新しい視点を獲得することをねらいとしている。

関西 IPE 研究会は 2013 年に発足したが、代表・渡邊洋子氏を中心とした異業種交流の活動は、2005 年から行われてきた。ここでは、どのようなプロセスを経て関西 IPE 研究会が発足に至ったかの経緯を概観し、専門職教育者の異業種交流を目指してきた我々が直面した課題を整理したい。

関西 IPE 研究会に繋がる異業種交流の活動は、2005 年に京都大学医学部医学教育推進センターの当時のセンター長・平出敦氏と渡邊氏が共宰して実施した「医療と教育を考える勉強会」に始まる。同会では、医師を中心とする医療者と教育学研究科の教員・院生とが、情報・意見交換をすることを目的に毎月一回程度、勉強会を開催し、2010 年まで継続した。興味深いことに、勉強会には、医療者以

外にも、企業内教育や海上保安官育成、図書館司書育成などに関わる実践者が参加しており、医師養成についての議論を手がかりとして、さまざまな専門分野の実践者が指導・育成への示唆を得ており、医学領域に限らず「専門職の育成」は多くの実践者にとっての課題であること



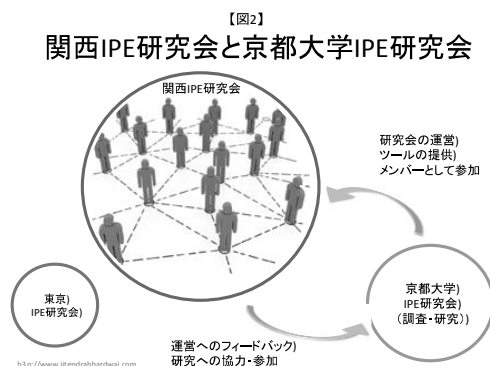
が、実感として理解された。

その後、平成 19~21 年科学研究費補助金(萌芽研究)「医療教育従事者の専門職研修に関する成人教育実践研究-教育学専攻者を中心に」(代表・渡邊洋子)において、非医療系教育学専攻者の調査研究が行われた。イギリスでは、1990 年代以降、医学・医療者教育に教育学専攻者や教育実践経験者を積極的に登用する動きがあり、専門職教育に領域横断的に行う動きがあることが認められた。この研究成果から、「教育学研究者は、異なる価値や論理をもつ専門職者養成の文脈でどのように貢献できるのか」、「専門職教育において育成される専門職性とは何か」、^{プロフェッショナリズム}「専門職性には領域横断的共通項は認められるか」などの課題が抽出された²。

このような問題意識に基づいて、2011 年に京都大学大学院教育学研究科で生涯教育学を専攻する教員及び院生を中心に「京都大学 IPE 研究会」が発足した。同研究会は、専門職教育者を繋げるネットワーク構築を目指し、同年 3 月に、P・ジャービス著『生涯学習支援の理論と実践：「教えること」の現在』(渡邊洋子・吉田正純監訳、明石書店)の出版を記念ジャービス氏が来日した³際、ワークショップ「専門職教育で『教えること』：ピーター・ジャービス氏を囲んだオープントーク」(2011 年 3 月 6 日)が開催された。同ワークショップには、日本のさまざまな地域から看護や企業内教育をはじめとして幅広い領域からの参加を得、領域横断的交流へのニーズがあることはさらに明確化となった。

その後、京都大学 IPE 研究会は、日本のさまざまな地域で活躍する専門職教育者を領域横断的にネットワーク化することを試みたが、その実現には至らなかった。その要因としては、下記の点が考えられる。

- ① 専門職教育者の多忙さゆえのスケジュール調整の問題
- ② 異業種交流の意義の共有についての問題
- ③ 専門職教育者との意図の齟齬、協働関係を築くことの困難さ
- ④ 専門職教育実践の振り返りを促す仕掛けづくりや方法論の未熟さ



京都大学 IPE 研究会が直面したこれらの課題は、専門職教育者と教育学専攻者とは、同じ「教育」と呼ばれる仕事に従事しているが、かなり異なる仕組みや原理、価値観のもとで実践や研究にあたっているという事実から生じているものと考えられる。これらの齟齬や課題はどうして生じるのかを、共に考え相互への理解を深めることが、専門職教育者交流型 IPE には必要で

あるだろう。関西 IPE 研究会が発足した現在でも、これらの課題は十分に解決されたとは言えず、継続的な取り組みを要する。

現在の関西 IPE 研究会では、映画などを用いた多様な振り返りツールを提案・試行するなどして、専門職教育者の交流ネットワークの充実に向けて取り組みを続けている。「京都大学 IPE 研究会」は、大学に所属する教員・院生の組織として、このような交流の場を継続的に運営するためにはどうしたらいいかを戦略的に考え、既述した課題を探究するために手がかりとなる調査・研究を行っている。またこれらの活動に参加していた東京在住のメンバーは、「東京 IPE 研究会」として独自の会を運営し、年一回程度で互いの活動を報告し合っている（【図 2】参照）。

2. 専門職教育者交流型 IPE の取り組みの事例

—2013 年 3 月 23 日実施「職業人の成長と経験をシェアする」

本ワークショップは、京都大学 IPE 研究会主催で行われ、2005 年以降の異業種交流活動を通して知り合うことのできた現職の専門職教育者らと共に、企画の趣旨やテーマ、タイトル、当日の運営などについて話し合いを重ね、開催に至ったものである。「職業人の成長と経験をシェアする」というタイトルの背後には、現場での教育実践者が自分の経験や課題を持ち寄り、共有し合うことを通して、教育や育成について新たな視点を得てほしい、という意図がある。ジャービス氏をゲストとしながらも、講演などは依頼せず、現場で教育を実践している参加者のもつ経験や課題こそがワークショップの重要なリソースであると位置づけた。また、「専門職者」という言葉からは、法学や医学などの領域を想起されてしまうことを考え、「職業人」という表現とした。

参加者はジャービス氏を含めて 20 名であり、内訳は、看護（8 名）、医学（2 名）、薬学（1 名）、研究者（教育学、2 名）、演劇（1 名）、企業（1 名）、ユースサービス（1 名）教育学系大学院生（4 名）であった。ワークショップでは、主催者である京都大学 IPE 研究会代表・渡邊洋子氏（京

【プログラム】	
10:00	あいさつ 参加者紹介 ジャービス教授の紹介
10:30	各領域における養成システムの概要と課題の共有 （医学・看護・薬学・企業内教育）
12:00	ジャービスによるコメント：成人教育の基本的考え方について
12:30	昼食会
13:30	グループでの話し合い：職業人の成長と育成について プロダクトの作成：グループ内で得られた共通理解やメンバーに 共通する課題を模造紙にまとめる
15:30	プロダクト（模造紙）の共有と議論 ジャービス教授による各グループへのコメント
16:20	まとめ 参加者による感想（記述）

都大学大学院教育学研究科准教授）による挨拶後、参加者全員による簡単な挨拶が行われた。その後、参加者の主な領域である看護・医学・薬学・企業に関しては養成の全体像と実感している課題について参加者 4 名に話してもらい、全体で共有した。

後半の「グループで話し合い」では、領域の異なるメンバーがそれぞれ自分の領域の実際や課題を共有し、共通する課題や論点を見つけ出し、その点について掘り下げることを目的とし

た。最終的には、話し合いの内容をプロダクトとして、絵や図を用いて模造紙にまとめ、全体で共有した。

3. 専門職教育者交流型 IPE の可能性と課題 –ジャービス教授による提起を手がかりに

専門職教育者交流型 IPE の可能性と課題を論じるには、分析・考察が不十分であり、拙速ではあるが、同ワークショップにゲストとして参加したジャービス教授の提起を手がかりとして、今後、論証を必要とする仮説を何点か示しておきたい。

ジャービス教授はこのような専門職教育者交流型 IPE の意義を積極的に評価しようとする立場から、ワークショップ内で参加者に向けて何度か発言をした。当日の筆者のメモや一部の IC レコーダ記録から整理すると発言の主な要点は次の三点であり、専門職教育者交流型 IPE の意義と可能性を示唆している。

1) 専門職教育者交流型 IPE の意義と可能性

● 成人を教えるという＜共通項＞

ジャービス氏が同ワークショップを通して、一貫して強調した点は、参加者には幅広い多様性がありながら、「おとなを教える」という明確な共通項を有している点であった。専門的知識や技術については大学や職場でトレーニングを受けることができるが、「おとなを教える」とこと関してはトレーニングの機会が少なく、我々は専門職教育者でありながら「おとなを教えること」について、理解していない部分が多い。加えて、日々の業務では焦点化されにくい教育者としての役割は、このような教育・育成をテーマとした領域横断的 (inter-professional) な場ではより際立ってくる。全く異なる専門領域にありながら、「おとなを教える」という専門職者としての役割を共通項として集うことで、「おとなが学ぶこと／教えること」についての新しい理解が得られるだろう。

● 成人教育における「学ぶこと」と「教えること」

ジャービス教授は、「学習」は、単なる認知活動ではなく、感覚や感情、身体を含めたひと全体 (the whole person) として捉えられるべきものとして位置づけられるべきであるとした (本誌 p.104【図 1】参照)。教師は情報の伝達でもって「教育をしている」と見なすことが少なくないが、学習者は単に情報を受けただけで学習するのではなく、学習者は、実際に何かを「なすことによって学ぶ (learning by doing)」のであり、この経験は学習者本人が次の状況や課題に向かうことのできる「自信」に繋がる。「生きる」という営み自体がこの学習プロセスを必要とするため、我々 (生き物も含め) はすべて学習能力をもつ存在である。学習支援者の役割は、誰もがもつ学習能力をいかにして引き出し、のびのびと開花する環境をつくるかにある。

このような、「学習・教えること (学習支援)」とは何かを問うことは、専門職者・職業人育成の現場では、日常業務と平行して教育・学習活動が行われるため、かなり困難である。しか

し、専門職教育者として直面している課題が解決される糸口は、このような人が学ぶこと・育てることについての原理的問いについて、他の実践者ととともに考えることにありとえられるのではないだろうか。

● 専門職教育者の経験から理論へ

本ワークショップのような専門職教育者の領域横断的交流は、教育者である我々が自分たちの経験を持ち寄り、共有することで、専門職者・職業人を育てるための理論を独自に形成する可能性を拓くものである。「理論」にはいくつかの種類がある（Jarvis, 1999, pp.144-7）⁴が、実践者が発達させる理論は、「実践についての独自の理論（Theory of Practice）」と呼ばれるものである。この理論は、教科書や講義で提示される理論とは異なり、自分自身が得た経験について、さまざまな学問領域から手がかりを得て行う省察的思考（＝実践者の研究）を通して発達されるものであり、この発達が専門職者としての力量形成を支える。したがって、我々の教育者としての経験を共有し、互いに検討することを継続していけば、専門職教育者としての「実践についての理論」を発達させることができ、教育者としての力量を高め自信を得ることが可能になる。

ジャービス氏は、著作のなかでこのようなプロセスを経て力量形成をする実践者を「研究する実践者（Practitioner-Researcher）」と呼び、重視してきた⁵。

2) 専門職教育者交流型 IPE の実践的課題

しかし、一方で、このような専門職教育者交流型 IPE を運営するには実践的課題があることも、2005 年以來の我々の経験からも実感として理解している。そのなかでも主要な課題とは以下の三点である。

- ① 専門職教育者交流型 IPE の意義の共有と信頼関係の構築
- ② 多忙な専門職教育者が参加できる柔軟な仕組みづくり
- ③ 領域横断的な場での振り返りを促すツールの開発

①に関しては、専門職と教育の両方の業務を担う専門職教育者が、多忙さのなかで「なぜ異業種交流の機会が重要なのか」を共有すること、またこのような会を運営する大学研究者の組織である「京都大学 IPE 研究会」と信頼関係を構築することは、相互性を前提とする「交流」にあたっては肝要な点であるが、容易ではない。

②については、現在、サイボウズ®を通して研究会の概要や予定などは共有しているが、信頼関係に基づく双方向性という点で課題を抱えている。異業種交流の意義の一つは、日常業務においてあまり言語化されないことを互いに言葉にし合うことにありとえられるが、この作業は、個人の信念や価値観、経験を他者であるメンバーに話してもよい、という信頼関係を前提

とする。多忙さゆえに研究会に参加できないメンバーを繋ぐために、SNS (ソーシャル・ネットワーク・サービス) の活用には一定の有効性はあると言えるものの、バーチャルな場で「交流」を支える信頼関係を保持できるのかという課題は残る。

③専門職者のための「振り返り」に関しては、近年、さまざまなツールが開発されつつある⁶が、領域の異なる専門職教育者が互いの経験を引き出し、共有し振り返ることを促すツールは、管見のかぎりほとんどない。関西 IPE 研究会では、映画を使うなどの新しい取り組みを行っており、今後、どのようなテーマや方法であれば有効なのかなども、交流を継続するなか検討される必要がある。

以上、本稿では、関西 IPE 研究会における「専門職教育者交流型 IPE」の取り組みを簡単に整理し、このような交流の意義と可能性を「仮説」として示すことを試みた。本稿は、「仮説」以上の論証を目的としておらず、現段階では分析・考察も不十分ではあるが、従来、同一領域内で行われることの多かった専門職者・職業人の育成であるが、領域を横断して互いの経験や課題を共有することではじめて、育成についての課題が浮き彫りになり教育実践者としての次の第一歩を踏み出すことができるのではないかと考える。関西 IPE 研究会へのこれまでの関わりから筆者は、現場で次世代の育成を担う実践者の経験と課題は、領域を越えて他の実践者にとっても示唆的であり、教育実践者としての力量形成のすぐれたリソースになりうると考えている。

「専門職教育交流型 IPE」という取り組みは、まだ萌芽段階であるがゆえに課題も多いが、実践者が専門職教育者としての力量を高められる場となり、日本における専門職教育の理論と実践とを探究できる場となることを展望して、今後も活動と継続していくことが肝要であろう。

¹ IPE の概念整理については、渡邊論文 (本誌、p.3-8) 参照

² 研究成果報告書「医学教育従事者の専門職研修に関する成人教育学的実践研究-教育学専攻者を中心に」(課題番号 19653089、平成 19~21 年度科学研究費補書金 (萌芽研究)、渡邊洋子、2010 年)

³ P. ジャービス著、柴原真知子訳「学習支援者になるために (シンポジウム報告 変動する現代社会のなかで「教えること」とは：高等教育・生涯学習をめぐる日英研究者の対話)」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』、第 11 号、pp. 151-159.

⁴ Jarvis, P. *The Practitioner-Researcher: Developing Theory from Practice*. Jossey-Bass, 1999.

⁵ 本誌、p.118-122 におけるジャービス教授による、現職薬剤師のための大学院課程や博士号 (Pharm D) の議論も、この「研究する実践者」論から発展されたものである。伝統的な博士号 PhD だけでなく現職者向けの研究コースの設置・運営を行うことが、現代社会における大学の重要な役割の一つとしている。

⁶ Taylor, B. *Reflective Practice for Health Care Professionals: A Practical Guide*. Open University Press, 2012.